

論文

定時制高校生への修学継続支援としての居場所づくりから学習支援への展開 —個別支援から政策形成に至るコレクティブ・アプローチ実践—

内田 充範

Mitsunori UCHIDA

本稿では、定時制高校における修学継続支援として、行政、高校、社会福祉法人、NPO法人が連携して取り組んでいる居場所づくり・学習支援カフェ事業の実施状況をコレクティブ・アプローチの展開プロセスを用いて検証した。その結果、この取り組みは、カフェ事業を中心として定時制高校生への個別支援からネットワーク構築を伴う地域支援を経て政策形成に至るコレクティブ・アプローチ実践であることを明らかにした。また、自から助けを求めにくい現代社会において、このようなカフェ事業を中心とした取り組みは効果的な取り組みであり、その展開プロセスにおいて構築されるネットワークが、学校、公的機関、社会資源に家庭を加えたネットワークへと発展していくことが望ましいと考える。

キーワード：定時制高校、居場所づくり、学習支援、コレクティブ・アプローチ

I. はじめに

わが国における定時制高校は、勤労青少年に高校教育の機会を与えることを目的に1948年に創設された。しかし、定時制高校の生徒数は、経済事情が好転し、日常生活に余裕が生まれ、全日制高校への進学が増加するようになったことから減少し（上田2004：363）、ピーク時の1953年には、577,162人（22.7%）であったものが、1996年には、106,109人（2.3%）となった（文部科学省2013）。この定時制高校生徒数の減少は、日本社会における勤労青少年の絶対数が激減したことにより、定時制高校が、創設当時の勤労青少年教育機関としての存在意義を失った（板橋文夫・板橋孝幸2007：273）と考えられている。

しかしながら、定時制高校は、中卒の勤労少年や中高年者だけでなく、登校拒否や長欠などの問題を抱えた生徒、学校への不信感から全日制を中退した生徒、知的な障害や身体に障害を持つ生徒、さらには難民を含めた外国人生徒、海外から

の引き上げ生徒など、修学の動機や背景を異にする生徒たちの多様化現象（上田2004：365-366）にある。このため、定時制高校生徒数は、高等学校総生徒数が減少する中、2001年以降は、11万人前後で推移し、2012年には、高等学校総生徒数3,243,422人中112,187人と3.5%を占めている（文部科学省2013）。

このように、定時制高校は、多様な生徒を受け入れているわけであるが、一方で、定時制高校生の中途退学率は、全日制的1.2%に比べ、14.5%と非常に高くなっており、その主な理由は、進路変更と不適應が70%近くを占めている（文部科学省2011）。

II. 研究概要

1. 研究目的

本稿は、先述したように、中途退学率の高い定時制高校において、修学継続を支援するために、行政、高校、社会福祉法人、NPO法人が連携し

て行っている取り組みについて、その中心となっているカフェ事業の開設経緯及び実施状況を検証することによって、定時制高校生への個別支援からネットワーク構築を伴う地域支援を経て政策形成に至るコレクティブ¹⁾・アプローチの実践を提示するものである。

2. 研究方法

2015年7月、X市（政令市）が定時制高校においてカフェ形式で実施している学習支援事業を訪問し、その様子を観察するとともに、利用生徒、カフェ事業のコーディネーター、定時制高校教諭から聞き取りを行った。さらに、同年11月に再訪問し、学習支援コーディネーターから聞き取りを行った。これらに加えて、2014年度の事業報告書の内容を松端の提示するコレクティブ・アプローチ展開プロセス例（松端2012：232）を用いたコレクティブ・アプローチの8項目にそって、定時制高校学習支援プロジェクト事業の展開プロセスを検証する。

3. 調査対象

本調査の対象の関係は次のとおりである。市立Z高校は、行政、社会福祉法人、NPO法人等と連携し、生徒の学習の支援や、中途退学の防止の取り組みとして、(1)のカフェ事業を中心に、(2)の学習支援などと組み合わせた取り組みを展開している。

(1) カフェ事業

X市が社会福祉法人Yに事業を委託し実施。実施は、X市内の市立Z高校内で、毎週金曜日17時から22時。

(2) 学習支援

NPO法人QがR県ボランティア基金事業の予算を利用し、市立Z高校内で実施。実施は、カフェ事業と同様の毎週金曜日17時から22時。

Ⅲ. 定時制高校学習支援プロジェクト事業

1. 事業報告書にみるカフェ事業の概要

(1) 事業実施経緯と実施状況

X市（政令市）は、生活保護・生活困窮者家庭の学習支援事業の一環として、定時制高校における学習支援プロジェクト事業を構想した。この学習支援事業は国の子どもの貧困対策事業²⁾にも位置づけられている。本事業は、2014年10月から、X市内の市立Z高校のスペースにおいて、カフェ形式で毎週金曜日の17時から22時まで、定時制高校生徒を対象に開始された。事業のねらいとしては、学力不振等による中途退学の防止、基礎学力の向上と進路との関係性理解による学校生活習慣の確立、多様な進路選択に対応するための基礎学力の向上、将来的に自立した生活が可能となる基礎学力を身につけるという4点があげられている。実施体制は、X市内の社会福祉法人Yに事業委託し、同法人職員をコーディネーターとして、学生等のボランティア3人と4人体制で運営されている。2014年度6か月間の利用状況は、全生徒264人中31.4%にあたる83人が利用し、全18回の開催でのべ491人が利用している。

(2) カフェ利用生徒及び先生との関係

カフェを利用する生徒のタイプとしては、昼間部生徒で、夜間部の授業終了後の部活動までの時間を過ごす「部活待ちタイプ」、昼間部、夜間部を問わず、家庭や地域に居場所のない境遇にある「居場所ニーズ型タイプ」、人間関係が希薄であったり、精神的な課題をかかえたりして先生やスタッフの声掛けにより不定期ながらもカフェに顔を出す「支援ニーズ型タイプ」がある。また、カフェ利用の経路としては、カフェを利用し心地よさを感じた生徒から誘われてくるようになる「グループ型」、スタッフの声掛けによりカフェを利用する「スタッフ声掛け型」、生活状況などが気掛かりな生徒を先生がカフェに案内する「先生声掛け型」がある。

先生とのかかわりについては、カフェが職員室前に配置されていることから、授業の前後や時間

ができた先生がカフェを通りかかる際に、生徒とのコミュニケーションを図ったり、学習指導をしたりすることで、先生と生徒とのつながりを促進している。

(3) 支援状況

学習支援については、プリントを準備してカフェで学習するというを考えていたが、生徒との信頼関係が構築されないうちは定期試験や検定試験前などの明確な目的のある時に限られていた。しかしながら、生徒たちがカフェを心地よい居場所として活用してくれるようになり、スタッフとの信頼関係ができてくると、先生が用意する課題に取り組む生徒が増えるなど、カフェが学習の場であるという認識が生徒の間に広まってきている。

個別支援としては、生徒からの直接の相談や先生を経由しての相談をカフェのスタッフがじっくり聞いたうえで、課題を整理し、情報提供するなどしている。その経過を先生に伝えたいうえで、児童相談所等の相談機関、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの専門職、医療機関等の専門機関へつないでいる。

キャリア支援としては、個別支援同様に、生徒からの直接の相談や先生を経由しての相談をカフェのスタッフがじっくり聞いたうえで、生徒のニーズを引き出し、情報提供や事業受託法人の関連事業、その他法人を紹介しての職業体験の機会を提供している。

2. カフェ風景

当日は、期末試験中ということで、授業時間が短いため、16時から21時までの開催予定となっていたが、開始時刻前から、試験を終えた中間部の生徒たちが集まり、七夕飾りを作るということで話が盛り上がっていた。このため、カフェ・コーディネーターのBさんが、勤務法人が運営している施設用に用意した笹を取りに行っているところだった。間もなく、Bさんが笹を持ち帰ると、すでに短冊に願いを書き終えていた生徒たちが笹に

結び始めた。中には、どんな願いをかなえてもらうか、悩みに悩んでなかなか書けない生徒もいた。短冊を結び終えた生徒たちは、思い思いに友人やスタッフと話したり、時にはふざけあったりと、様々に時間を過ごしていた。一つのテーブルでは、数人の生徒が、ノートを広げて、試験勉強をしているようで、ペンを走らせていた。

前々回から、学習ボランティア団体の協力で、別室で学習支援が行われていたが、生徒たちは、なかなかそちらの教室には足を向けにくいようで、数人の生徒のみが個別指導を受けていた。しかし、学習支援のコーディネーター、スタッフも支援が終わると、生徒たちのいるテーブルへ移動して、和やかに話をしていた。

Bさんは、生徒たちが囲んだテーブルを渡り歩くようにして、話を聞いていたが、カフェの前を通って下校する生徒を見つけると、すぐに立ち上がり、短冊を差し出して、願い事を書いていかないと誘っていた。中には、短冊を受け取り、笹に結び付けて帰って行く生徒もいたが、書かないと断りそのまま帰る生徒や菓子とドリンクだけで帰る生徒もいた。

そして、夜間部の終了時刻間近になると、教室の前まで行き、カフェに寄らないかと声掛けをしていた。声掛けに応じて、20人以上の夜間部生徒が滞在時間の長短はあるもののカフェに立ち寄って、菓子とドリンクを手に取り、スタッフや生徒同士で雑談するなどして、Bさんに見送られて学校を後にしていた。

3. 利用生徒（中間部2年生）Aさんの話

友人とポスターやチラシの開催案内を見て、行ってみようかということで参加することにした。その友人とは、カフェで、いろんな話をするようになり、中学校時代に同じ体験をしていたことが分かり、お互いに涙した。カフェには、初回から参加していて、毎回参加している。

カフェのなかった1年前期は、クラスの友人が少なかったが、カフェに参加するようになり、友人が増え、男子生徒とも話すようになった。（授

業の時間帯では、友人同士でもゆっくり話す時間はなく、新しい友人関係もなかなか生まれにくいと思われる。)

カフェでは、スタッフの人たちにいろんな話をしている。話の内容は、アルバイトや勉強、家族のことで、中には、恋愛のことを相談する友人もいる。学校の先生には話さないことも話していて、自分をオープンにしているという感じである。先生が怖いとか嫌いとかいうことではなく、どうしてもこちらが構えてしまうが、スタッフにはそういうことなく話を聞いてもらえる。

今日もスタッフの一人の誕生日をサプライズで祝うことになっている。スタッフの誕生日が近づくと、みんなに連絡して、祝おうと思う人たちそれぞれがプレゼントやバースデイケーキを用意している。もう誕生日を祝うスタッフも3人目になったので、うすうす感づいていると思う。

学校はとても楽しく、これまで、無遅刻無欠席で、中途退学などは考えてもいない。授業には集中して取り組んでいるので、カフェでは、あらためて勉強するというよりも、少しゆるい感じで、友人と話をしたりしながら勉強をするという雰囲気が好きで、別室でやっている学習支援は、まだ3回目で行けていない。

人と話すのが苦手という意識がある。(実際は、質問に的確に答えてくれて表情も明るく、コミュニケーション能力は高い印象)学校なので、安心感があるから話せるが、外では話せない。細かい作業が好きで、集中して取り組むことができるので、人とあまりかかわらないですむ仕事と思うが、まだ、具体的に何になりたいかは想像がつかない。

カフェには、毎回立ち寄って終わりまで過ごしていて、今日は、七夕の短冊を書いたり、数人とカード・ゲームをしたりして楽しんだ。

4. カフェ・コーディネーターBさんの話

全国的にも学校内での居場所づくりの取り組みが少ない中で、特に、定時制高校ということで、どういうスタイルで実施するか、学校との関係を

どうするのか、参考にする例もない状況だった。

そもそも、居場所づくりなのか、学習・生活支援の拠点なのか、自分としては、まずは居場所をつくって、生徒たちの思いを聞いて行くという考えだったが、学校という性質上、学習支援を重視していこうということになった。高校を中途退学する理由としては、勉強がわからないということが多いため、そのことを解消していかなければならない。少々、自分のイメージとは違ったが、実際には、思っていた以上に、定期試験や資格取得の直前などには、まじめに勉強する生徒がたくさんいて、学習支援の場にもなっている。

職業相談に関しては、高校が積極的にキャリア教育に取り組んでいるので、インターンシップや職業体験をする前段階での相談として、「あでもない、こうでもない」という話を聞いている。その時には、意識的に、職種紹介や就職のための道筋などを伝えている。また、卒業後、専門学校や大学へ進学したいという生徒には、制度面の紹介や支援をしているが、経済的に余裕がない場合は、親が反対しているという場合もあって、簡単にはいかない。

カフェでは、授業中には見えない生徒たちの抱えている生活面や精神面での課題に気づくこともある。そんな時は、まず、じっくり話を聞いて、生徒自身がそのことを受け入れた上で、専門家につなげていくようにしている。

期末試験が終わると夏休みに入り、2か月近く、このカフェも開催されない。今、一番心配しているのは、その間、生徒たちの様子を把握することができなくなることである。2か月近く離れることで、学校に来られなくなる生徒が出ないかと気が気でない。そのため、夏休みの8月16、17日に、所属先の社会福祉法人で一泊二日のキャンプ³⁾を企画して、参加者を募っている。他の団体も対象としているイベントであり、学校以外の人との交流の機会にもなると考えているが、スタッフの人数との関係で、全体での参加可能人数は40人となっている。現在20数人の生徒が申し込んでくれるが、申し込んでいない生徒の中に気になる

生徒がたくさんいる。

自分は、どちらかというと、型をつくらずに、生徒のニーズに合ったスタイルを作っていくのが得意である。いろんなニーズをもった生徒がいて、生徒の中でも一つ一つ違う問題を抱えていて、そのことに対応していくことが楽しい。

20年前、大学時代に、高校生のグループづくりをした経験がある。今の高校生は、家庭や社会の環境（携帯電話やネット上での友人関係と現実の友人関係とが交錯している。）が違いすぎて、大変ではあるが、生徒のニーズを言語化できるように、しっかり聞きとり、生徒同士をつないでいくということは時代が変わっても変わらないように思う。

5. 学習支援コーディネーターCさんの話

所属しているNPO法人は、もともと高校生たちの居場所づくりやコミュニケーション能力向上などを通して、高校を無事卒業して、就労までつなげていくという目的の活動をしている。この高校でも居場所づくりをイメージしていたが、まずは、無事に卒業するためには学習が必要という先生の要望があり、年齢的に近い大学生が教えるというやり取りした学習支援スペースとした。その後、外国籍の生徒へのお知らせなどを通訳する日本語指導⁴⁾の話が持ち上がり、大学院時代の専攻が日本語教育で、現在も大学と民間学校で日本語教師をしていることから、大学生ボランティアと学ぶ日本語というスタイルを提案させてもらい、日本語教育と学習支援との両方を行っている。

法人の実施している事業の特徴のひとつとしては、大学生と高校生との交流を通して、自分の将来像を描けるようになるということがあるが、こちらの高校にはキャリア支援のNPO法人も支援に入っているの、学習支援を中心に行っている。大学生のボランティアは10人くらいが毎回4人ローテーションで参加しているが、D大学のゼミの一環として参加していることから、今日は、来年度のゼミ希望学生が6人加わっていた。

初めのころは、カフェで勉強をしていた生徒を

こちらの学習支援スペースに誘うという形で、明確に勉強したいことが決まっている生徒や「分数のここがわからない」というような生徒が、徐々に増えていった。とはいえ、学習支援スペースに入りづらい生徒には、カフェまで行って指導することもあった。その後、スタッフにも慣れてきたようで、こちらにも顔を出す生徒が増えたのはよかったが、置いてあるお菓子だけを食べて帰る生徒が多くなり、カフェ事業との棲み分けがあいまいになりつつあったので、百マス計算を生徒とスタッフで競うというゲーム感覚を取り入れた学習スタイルを導入した。生徒たちで賑わうのもいいが、勉強したい生徒が通り過ぎてしまうような状況を解消できるよう静かな環境を作ろうとしている。その効果があつてか、今日は、調べ学習のまとめをしたいという生徒が一人来て取り組んでいる。

定時制高校での活動は、初めてだったため、どのように関わっていけばいいか不安もあったが、生徒たちは素直でまじめという印象を持っている。一見難しそうな生徒でも、コミュニケーションを求めている、カフェの方から紹介された生徒が、中学時代のことを話してくれ、いろいろ難しい課題はあるけれど、部活を続けたいとか、もっと頑張りたいという前向きな発言をしてくれる。このように、カフェ事業と私たちの学習支援事業は別事業ではあるが、生徒が話を聞いてほしいときに聞ける人が聞いたり、生徒が聞いてほしいスタッフが聞いたりというスタイルがいいと思う。話の内容は、生活課題から恋愛問題、時には経済的な問題もあり、話を聞いたうえで、カフェ事業コーディネーター、先生との三者で会議を開いて、対応できた例もある。

メインの学習支援では、外国人生徒に対して、日本語の理解が難しい国語の題材をやさしい日本語に置き換えたり、絵を使ってストーリーを説明したりするという工夫をした。国語科の先生からは、理解するには難しい題材と思っていたにもかかわらず、成績が上がった、現状維持できたという成果を評価していただいた。生徒たちは、その

後、毎週参加するようになり、時につかれて休む日もあるが、参加頻度は増している。

また、先週から、故郷の街をテーマにした新聞づくりをしている。以前かかわった学校での経験を活かして、学校に使っていないタブレットを貸してもらって、インターネットで調べた内容をもとに書いてもらっている。USBを用意して、自宅学習できるようにしており、出来上がったら担任の先生に見せて評価してもらおうと張り切っている。

このように、学習支援という枠組みの中で、いかにみんなで楽しみながら活動できるかということに重きをおいて、学習を通しての自分の可能性を見出してもらえるような支援をしていきたいと考えている。つまり、学ぶことを一つの方法として、自分に自信を持つツールになればいいと思っている。

Ⅳ. 個別支援・地域支援から政策形成に至るコレクティブ・アプローチ

1. コレクティブ・アプローチとは

コレクティブ・アプローチは、コミュニティワークの主体としての課題をかかえた個人への支援（個別支援）を通じて、個人の課題を地域社会の課題として当事者はもちろん、近隣住民やボランティア住民等がともに地域変革へチャレンジ（地域支援）していくものである（加納2003：83）。この個別支援から地域支援へとつながるプロセスにおいて、当事者同士やボランティアサークル等の社会資源によるネットワークが形成され、さらには、ネットワークメンバーによる実践のふりかえりの中で改善を繰り返しながら支援が拡大・発展していき、より広域的な福祉政策が形成されるわけである。宇野は、一人ひとりの〈私〉というミクロな視点に立つことで、むしろ社会全体のマクロな動態も把握できる（宇野2010：181）、〈私〉は、〈私〉の実現のためにも社会を必要とする（宇野2010：184）と述べている。つまり、コレクティブ・アプローチは、「個別支援＝ミクロ視点」→「地域支援＝メゾ視点」→

「政策形成＝マクロ視点」というソーシャルワークの拡大・発展プロセスを具体的に示したアプローチであり、個人（〈私〉）を社会へとつなぐ実践であるといえる。

2. 定時制高校学習支援プロジェクト事業におけるコレクティブ・アプローチ実践

以下に、松端のコレクティブ・アプローチの展開プロセス例（松端2012：232）を用いて作成した表1 コレクティブ・アプローチの8項目にそって、カフェ事業を中心とした定時制高校学習支援プロジェクト事業の展開プロセスを検証する。

表1 コレクティブ・アプローチの8項目

1	参加舞台の構想と参加の演出
2	課題への自身の気づきの促し
3	「共感」体験の尊重
4	課題解決への「やる気」の創出
5	課題に対する解決策の検討
6	「やる気」を課題解決活動へつなぐ支援
7	活動拡大の可能性の検討
8	参加者の変化・成長の確認と次への展開

出所）松端克文2012：232を参考に筆者が作成。

表2は、コレクティブ・アプローチの8項目に合致するカフェ展開プロセスの実際を事業報告書、カフェ風景、利用生徒及びスタッフの話における特徴的な個所から具体的に示したものである。

『参加舞台の構想と参加の演出』としては、事業のねらいにあるキーワードとしての「中途退学防止」、「基礎学力の向上」、「進路・自立支援」を達成するための場として定時制高校内のカフェ形式を構想している。〈全国的にも学校内での居場所づくりの取り組みが少ない中で〉（カフェ・コーディネーターBさん）という言葉にあるように、高校および行政と協議を重ね、前例の少ない中でのカフェ形式というスタイルを取ることにより、生徒の参加を演出している。そして、運営体制として、行政や高校の直営方式を取らず、社会福祉法人やNPO法人さらにはNPO法人を通じての大学生ボランティアとの協働体制に

表2 定時制高校学習支援プロジェクト事業におけるコレクティブ・アプローチ

コレクティブ・アプローチの8項目	事業報告書、カフェ風景、利用生徒及びスタッフの話における特徴的な個所
参加舞台の構想と参加の演出	<全国的にも学校内での居場所づくりの取り組みが少ない中で> (カフェ・コーディネーターBさん) <生徒たちが集まり、七夕飾りを作るといことで話が盛り上がっていた。このため、カフェ・コーディネーターのBさんが、勤務法人が運営している施設用に用意した笹を取りに行っている> (カフェ風景)
課題への自身の気づきの促し	<授業中には見えない生徒たちの抱えている生活面や精神面での課題に気づくこともある。そんな時は、まず、じっくり話を聞いて、生徒自身がそのことを受け入れた上で、専門家につなげていくようにしている。> (カフェ・コーディネーターBさん)
「共感」体験の尊重	<その友人とは、カフェでいろんな話をするようになり、中学校時代に同じ体験をしていたことが分かり、お互いに涙した> (利用生徒Aさん) <生徒のニーズを言語化できるようにして、しっかり聞きとり、生徒同士をつないでいく>、<夏休みの8月16、17日に、所属先の社会福祉法人で一泊二日のキャンプを企画して、参加者を募っている。他の団体も対象としているイベントであり、学校以外の人との交流の機会にもなると考えている。> (カフェ・コーディネーターBさん)
課題解決への「やる気」の創出	<高校を中途退学する理由としては、勉強がわからないということが多いため、(中略)定期試験や資格取得の直前などには、まじめに勉強する生徒がたくさんいて> (カフェ・コーディネーターBさん) <何かとトラブルを起こしたりするけど、部活を辞めたくないとか、もっと頑張りたいとかという前向きな発言をしてくれる> (学習支援コーディネーターCさん)
課題に対する解決策の検討	<そもそも、居場所づくりなのか、学習・生活支援の拠点なのか、自分としては、まずは居場所をつくって、生徒たちの思いを聞いて行くという考えだったが、学校という性質上学習支援を重視していこうということになった> (カフェ・コーディネーターBさん)
「やる気」を課題解決活動へつなぐ支援	<生徒が話を聞いてほしいときに聞ける人が聞いたり、生徒が聞いてほしいスタッフが聞いたりというスタイル>、<(新聞が)出来上がったら担任の先生に見せて評価してもらおうと張り切っている> (学習支援コーディネーターCさん)
活動拡大の可能性の検討	<外国籍の生徒へのお知らせなどを通訳する日本語指導の話が持ち上がり>、<外国人生徒に対して、日本語の理解が難しい国語の題材に対して、やさしい日本語に置き換えたり、絵を使ってストーリーを説明したりするという工夫をした> (学習支援コーディネーターCさん)
参加者の変化・成長の確認と次への展開	<支援ニーズのある生徒がまだまだ少なく、先生や関係機関との連携をより強め、いかに支援ニーズのある生徒を把握し、カフェに誘導し、利用を促進して行くかが課題である> (事業報告書) <学習を通しての自分の可能性を見出してもらえるような支援をしていきたい>、<学ぶことを一つの方法として、自分に自信を持つツールになればいいと思う> (学習支援コーディネーターCさん)

出所) 松端のコレクティブ・アプローチ項目から筆者が作成。

より、社会資源の参加を実践している。また、<生徒たちが集まり、七夕飾りを作るということで話が盛り上がっていた。このため、カフェ・コーディネーターのBさんが、勤務法人が運営している施設用に用意した笹を取りに行っている>（カフェ風景）というように、生徒たちの提案した活動を可能な限り支援している。つまり、中途退学を防止することは、学習支援に限らず、生徒同士がつながって、高校へ通うことの楽しさを持つことも重要であり、このようなイベントを企画することで、生徒たちの参加を演出しているといえる。

『課題への自身の気づきの促し』としては、<授業中には見えない生徒たちの抱えている生活面や精神面での課題に気づくこともある。そんな時は、まず、じっくり話を聞いて、生徒自身がそのことを受け入れた上で、専門家につなげていくようにしている>（カフェ・コーディネーターBさん）というように、カフェに参加して、コーディネーターやスタッフとのコミュニケーションの中から、課題を察知し、傾聴の姿勢から、生徒自身がそのことを受容できるよう支援を行っている。

『「共感」体験の尊重』については、<その友人とは、カフェで、いろんな話をするようになり、中学校時代に同じ体験をしていたことが分かり、お互いに涙した>（利用生徒Aさん）というように、カフェの参加が、過去の辛い体験を自分だけのものとして抱え込むことなく、共有、共感することによって、乗り越えることができたのではないかと考える。また、<生徒のニーズを言語化できるように、しっかり聞き取り、生徒同士をつないでいく>（カフェ・コーディネーターBさん）というように、支援者側から意識的にカフェ参加生徒同士の共感を導いている。さらに、<夏休みの8月16、17日に、所属先の社会福祉法人で一泊二日のキャンプを企画して、参加者を募っている。他の団体も対象としているイベントであり、学校以外の人との交流の機会にもなると考えている>（カフェ・コーディネーターBさん）というように、学校外の活動への参加を促し、そこでの参加者同士での交流を通しての「共感」体験を仕掛け

ている。

『課題解決への「やる気」の創出』としては、<高校を中途退学する理由としては、勉強がわからないということが多いため、（中略）定期試験や資格取得の直前などには、まじめに勉強する生徒がたくさんいて>（カフェ・コーディネーターBさん）、<いろいろ難しい課題はあるけれど、部活を続けたいとか、もっと頑張りたいという前向きな発言をしてくれる>（学習支援コーディネーターCさん）というように、カフェ設置のねらいである中途退学の防止、基礎学力の向上、学校生活習慣の確立等の定時制高校生としての課題に対して、参加生徒たちが自ら気づき、「やる気」を持って活動していることがうかがえる。

『課題に対する解決策の検討』としては、<そもそも、居場所づくりなのか、学習・生活支援の拠点なのか、自分としては、まずは居場所をつくって、生徒たちの思いを聞いて行くという考えだったが、学校という性質上、学習支援を重視していこうということになった>（カフェ・コーディネーターBさん）というように、行政、学校、事業受託社会法人が協議のうえ、中途退学理由の多くを占める学習面での課題解決策を検討している。さらに、先述したように、定期試験前や資格取得の直前での学習活動はあるものの、通常時のカフェにおける生徒たちの学習活動を促すために、学習支援に取り組むNPO法人の協力を得て、学習支援カフェの開催を検討、実施している。

『「やる気」を課題解決の活動へつなぐ支援』としては、<生徒が聞いてほしいときに聞ける人が聞いたり、生徒が聞いてほしいスタッフが聞いたりというスタイル>（学習支援コーディネーターCさん）というように、生徒の思いを最優先し、カフェ活動への参加を誘導している。また、<（新聞が）出来上がったら担任の先生に見せて評価してもらおうと張り切っている>（学習支援コーディネーターCさん）というように、活動の成果を先生方に評価してもらおうということで、生徒たちの「やる気」を日本語習得という課題解決へつなげているといえる。

『活動拡大の可能性の検討』としては、学習支援・居場所づくりのカフェ事業からスタートして、＜外国籍の生徒へのお知らせなどを通訳する日本語指導の話が持ち上がり＞（学習支援コーディネーターCさん）というように、新たな活動を検討している。そのうえで、＜外国人生徒に対して、日本語の理解が難しい国語の題材に対して、優しい日本語に置き換えたり、絵を使ってストーリーを説明したりするという工夫をした＞（学習支援コーディネーターCさん）活動へ拡大している。

『参加者の変化・成長の確認と次への展開』としては、＜支援ニーズのある生徒がまだまだ少なく、先生や関係機関との連携をより強め、いかに支援ニーズのある生徒を把握し、カフェに誘導し、利用を促進していくかが課題である＞（事業報告書）というように、年度末評価による利用生徒の分析および課題をふまえての事業展望を行っている。また、＜学習を通しての自分の可能性を見出してもらえそうな支援をしていきたい＞、＜学ぶことを一つの方法として、自分に自信を持つツールになればいいと思う＞（学習支援コーディネーターCさん）というように、活動ごとの生徒たちの成長を大切にしながら支援展開している。

3. コレクティブ・アプローチの展開プロセスにおけるネットワーク構築

コレクティブ・アプローチは、その展開プロセスにおいて、個別支援を通じて、当事者と近隣住民やボランティア住民等がともに手を取り合って、課題解決にあたる地域支援へとつながっていくものである。

本カフェ事業においては、事業開始時からの社会福祉法人への事業委託による協働に加えて、学習支援NPO法人の事業参加により、社会資源の新たなネットワーク構築が実現している。また、このNPO法人では、大学生のボランティアの協力も得ており、ボランティアを継続的に派遣している大学とのネットワークが形成されるというように、カフェ事業を基盤としてのネットワークが拡大、展開している。

つまり、このカフェ事業の実践は、定時制高校生への個別支援から出発し、さまざまな地域の社会資源を巻き込み、それら社会資源のネットワーク構築を促す地域支援へと発展し、最終的に、このような事業がより広域な地域において事業展開されることで、福祉政策の形成へとつながっている。

このような定時制高校生への支援を進めていくうえでのネットワーク構築に関しては、原田の提示したFSCCネットワークが参考になる（原田・府川・林1997）。FSCCネットワークとは、家庭（Family）、学校（Shool）、専門機関（Counselling center）、地域（Cominity）が一体的に、児童・生徒に関わっていくという支援体制である。筆者は、原田の提示したFSCCネットワークの専門機関（Counselling center）を福祉事務所等の公的機関（Official facilities）に、地域（Cominity）を社会資源（Social resorce）に置き換えたFSOS⁵⁾ネットワークを提示する。カフェ事業においては、家庭とのかかわりが希薄ではあるが、定時制高校内のカフェ事業であることから、必要に応じて、学校と家庭との連絡、情報共有が行われることとなる。生徒の中には、家庭環境に課題をかかえている者もあり、すべての生徒が、FSOSネットワークに該当するわけではないが、今後の取り組みとして、学習支援による高校修学の継続から卒業後の就職支援につなげていくためには、家庭を巻き込んだ支援体制の構築が望まれる。

4. 修学継続支援から将来の自立生活のための就労支援へ

ここまで、定時制高校における学習支援・居場所づくり事業の実施状況について検証してきたが、本事業のねらいが、修学継続支援としての中途退学の防止、学校生活習慣の確立に加えて、進路選択のための基礎学力の向上、将来の自立生活を可能とする基礎学力修得とされているように、修学継続のみならず生徒たちの卒業後をイメージした支援となっている。

このことに関連して、宮本は以下のように述べている。1990年代終盤から2000年代にかけて、雇用環境の悪化や非正規雇用の増加に伴い、学校から仕事へのストレートな移行が変容したことで、就労困難な若者が増大した。この就労困難な若者への支援には、多くの人材と社会資源が必要となるが、学校在籍期間に、支援をスタートできれば、効果が上がると考えられる（宮本2015：7、21）。つまり、中学校以降の学校卒業後には、就職というルールが敷かれていた過去とは異なる先行きの見えない未来が現代の生徒たちには待ち構えているわけであり、本事業のような高等学校内における修学継続・就労支援事業が、全国的に教育・福祉の政策として実施されることが望まれる。

便箋に「たすけて」の文字を綴って孤独死した30代の男性、路上生活となっても「いまさら助けてとは言えません」というホームレスなど（NHKクローズアップ現代取材班2013）、現代社会は、個人の抱える困難を自身の責任ととらえる自己責任論が多数を占めている。つまり、学校における教育期間を終了して、いったん社会に出てしまうと、自立した一個人として捉えられ、困窮状態に陥っても助けてと言わずに、自力で何とかしようともがき苦しんでしまう。このことは、宇野が述べているように、「脆弱な個人の＜私＞の自意識がますます鋭敏化する一方で、同じような自意識を持った他者とのつながりは築けない（中略）個人はさらに脆弱になるという悪循環に陥っている」（宇野2010：185）と言えよう。しかし、「助けて」と言える、これこそが社会が社会であるための根拠（奥田・茂木2015：243）であるならば、自己責任論から脱して、助けてというのも一つの能力とみなす考え方を学校在籍期間に身に付ける必要がある。

V. おわりに

このカフェ事業の開設目的について、高校教諭が、＜本来、このような場所を開設する必要がなくなるのが理想であるが、生徒の中には、家庭等に居場所がないものもいることから開設した＞

と述べているように、本事業は、定時制高校生を取り巻く複雑化した環境やそのような境遇におかれている生徒の現状を何とかしたいという思いから事業化されたものである。このことに関連して、柴野は、社会とのつながりを持ちにくい子供や若者の存在が社会的な問題として捉えられるようになり、「居場所」という言葉が若者と関わり、支援する活動や施策のキーワードとなってきた（柴野2009：85）と述べている。

さらに、定時制高校というひとつのコミュニティにおいて生じた課題解決のために構想された事業が、＜高校は教育の場であるため、単なる居場所づくりに終わるのではなく、学習支援となる場を開設した＞というように、当初より、居場所づくりから学習支援への発展を意図していたことは、コレクティブ・アプローチの実践そのものである。本事業は、今後もさまざまな社会資源の参加を得ながら、さらに、事業拡大、発展していくものとする。

付記 本研究は、「JSPS科学研究費補助金・挑戦的萌芽 課題番号15K13087」の研究成果による。

注

- 1) コレクティブとは、「集合的な、集団的な」の意。
- 2) 子どもの貧困対策に関しては、子どもの貧困対策の推進に関する法律第8条の規定に基づき、子供の貧困対策に関する大綱が、2014年8月に策定され、スクールソーシャルワーカーの配置拡充、中学生を対象とした原則無料の学習支援、定時制・通信制など「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」、学習や意欲が十分でない生徒や、不登校・中退が多い高校に地域の退職教員や社会人、大学生などを配置する「補習等のための指導員等派遣事業」などが実施されている。
- 3) 本稿の定時制高校におけるカフェ事業とは別事業である。

- 4) 文部科学省によると、2014年5月時点で、全国の公立学校で日本語指導が必要な児童生徒は約37,000人となっている。
- 5) FSOSネットワークは、生活保護自立支援プログラムにおける中学生の高校進学のための学習支援事業の検証から明らかにしたものである。

習援助事業」に関する研究』報告書（平成26年度JSPS課題番号：26590112）
Y社会福祉法人2015『X市学習支援・居場所づくり事業2014年度事業報告書』

文献

- 原田正文・府川満晴・林秀子1997『スクールカウンセリング再考』朱鷺書房
- 板橋文夫・板橋孝幸2007「勤労青少年教育の終焉—学校教育と社会教育の狭間で—」随想社
- 加納恵子2003「コミュニティワーク主体のとりえ方」高森敬久・高田眞治・加納恵子・平野隆之『地域福祉援助技術論』相川書房
- 松端克文2007「新しい地域福祉とコミュニティの活性化」『マッセOSAKA研究紀要』第10号財団法人大阪府市町村振興協会・おおさか市町村職員研修研究センター23-34
- 松端克文2012「子供が参加する福祉教育の事例」相澤譲治ほか編『ソーシャルワーク演習ワークブック』みらい
- 宮本みち子編2015『すべての若者が生きられる未来を—家族・教育・仕事からの排除に抗して—』岩波書店
- 文部科学省2011「平成22年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果
- 文部科学省2013「定時制課程・通信制課程高等学校の現状」『学校基本調査』
- NHKクローズアップ現代取材班2013『助けてと言えない—孤立する三十代—』文春文庫
- 奥田知志・茂木健一郎2015『「助けて」と言える国へ—人と社会をつなぐ—』集英社新書
- 柴野昌山2009『青少年・若者の自立支援—ユースワークによる学校・地域の再生—』世界思想社
- 宇野重規2010『<私>時代のデモクラシー』岩波書店
- 上田利男2004『増補普及版・夜学—こころ揺さぶる「学び」の系譜』人間の科学社
- 内田充範2015『「生活困窮者家庭の子どもへの学

Developing “provision of a place of belonging” into study support for evening school students to facilitate their regular attendance: Implementing a collective approach to develop individual support into policymaking

Mitsunori UCHIDA

The government has been collaborating with evening high schools, social welfare corporations, NPO corporations on a project to provide a place of belonging, study support to evening high school students, in order to facilitate their regular attendance. In this study, the state of implementation of the project was verified, as compared with the development process of the collective approach. Consequently, this support project was found to involve the implementation of a collective approach that develops individual support for evening high school students into policymaking, through community support accompanied by network building. In the modern society, where people face difficulties in obtaining help, a support project such as this is an effective approach and the network built through its development process is beneficial for growing into a network of homes and schools, public agencies, and social resources.

Keywords: evening high school, providing a place of belonging, study support, collective approach